

大丈夫っ！これ水着だから！

FOR ADULT

ハヤテのごとく！FANBOOK



こんにちは、はじめまして。りんご紅茶の2月かずおです。
「大丈夫っ！これ水着だから！」と「大丈夫っ！ブルマだから！」の
今まで発行したナギ本を一つに纏めてみました。
ヒナギクも全部一つにするか？と言っていたのですが
あっちはページ数膨大なので検討中です・・・。

P 1～「大丈夫っ！水着だから！」

- ・ P 3～：2月かずお
- ・ P 19～：鷹宮沙玖羅
- ・ P 29～：樫見 正央

P 33～「大丈夫っ！ブルマだから！」

- ・ P 35～：2月かずお
- ・ P 53～：鷹宮沙玖羅
- ・ P 63～：樫見 正央

「大丈夫っ！ナギばかりだから！」

発行：りんご紅茶

発行者：2月かずお

URL：<http://www17.ocn.ne.jp/~ringoame/>

メール：futatuki@hotmail.co.jp





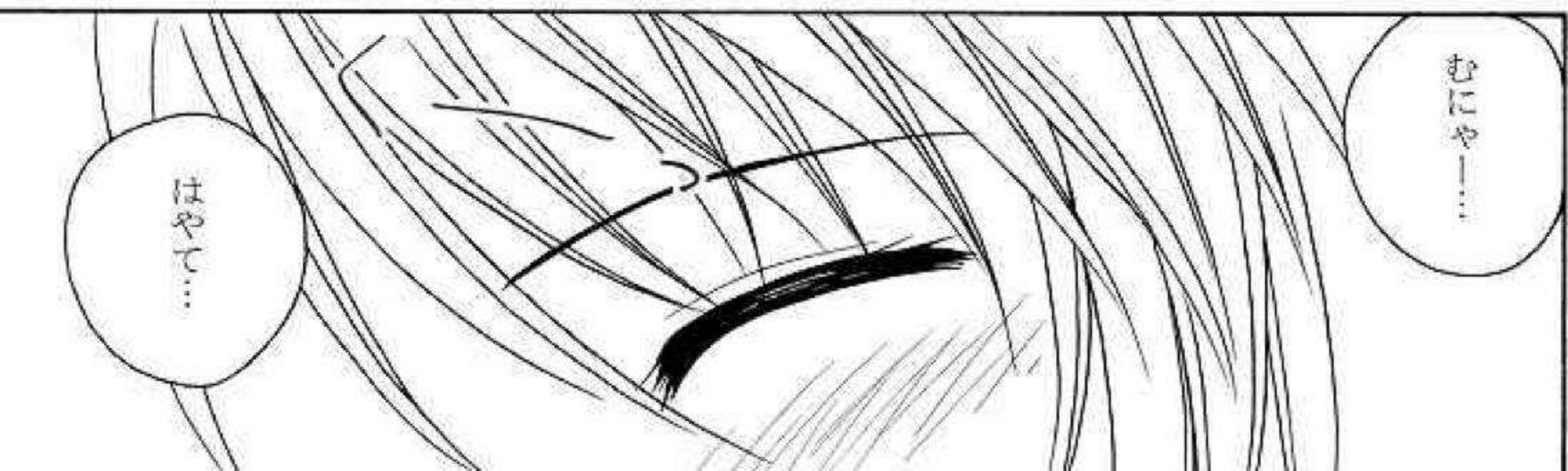
寝てくれたのはいいけど...

くー...

うーん...


これだと身動きが取れない...

たがーっ



むいっやー...

はやて...



大丈夫っ！
これ水着だから！

2007年4月22日発行
一番最初に作ったハヤテ本。
タイトルの意味は
表紙は、ぱんつじゃなくて
水着だとゆーことにしよう
とか言い出したから。





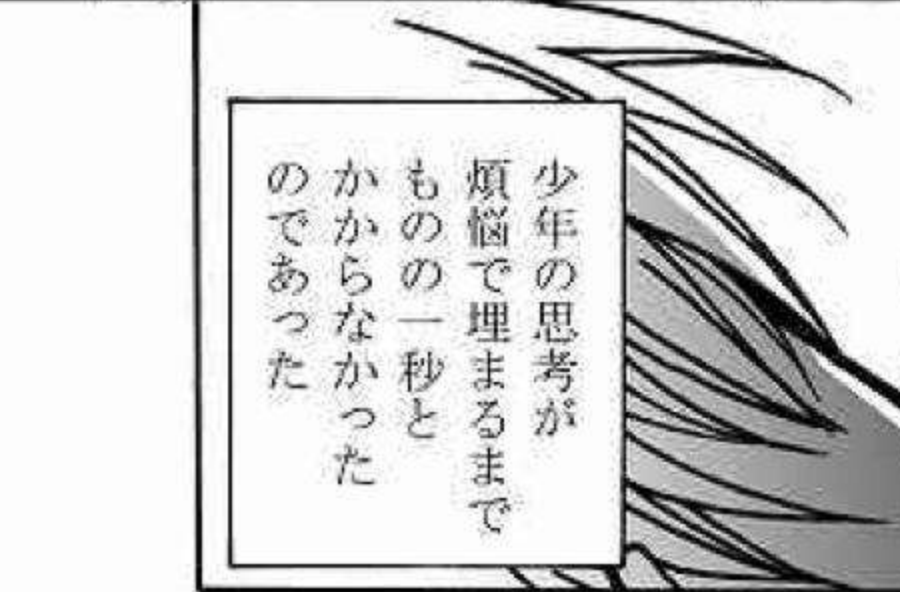


んじやー

はやてー



…とゆーことで
色々あって
今に至るので
あった



少年の思考が
煩悩で埋まるまで
ものの一秒と
かからなかった
のであった



この時
少年の心の中で
天使と悪魔が
戦っていたのだが



お嬢さまったら

髪縛ったままで
寝てしまうと
跡が残って…



……
お嬢さま

寝るときは
パジャマに
着替えましょうよ

うたやー…

ほら
お嬢さま
脱ぎますよ

脱がせて
しまいます
よーっ

はんなり
しつこく
お嬢さま
の
お尻
を
みる

ん…

あー…
思わず手が
胸に…っ

よく
寝てますね
お嬢さま

うっ

ふあ

その声は
少年の最後の理性をも
奪い去ってしまうのに
十分な破壊力を
持っていたのだった

おがーん、

あ……んっ

しーっ

んあっ

起きる気配が
ないですね
お嬢さま

このままだと
また手が
イケナイ所に
伸びてしまいますよ

う...

あん

しにっ

このままだと
更に奥まで
行ってしま
いますよ

お嬢さま

だいぶ濡れて
きましたね
お嬢さま...

ずいっ

ずいっ

このあたりが
感じるんですか？

んくっ

ぐいっ

し



ほち

あ…っ
ハヤテ…

あ…

えーっど



おい
びん



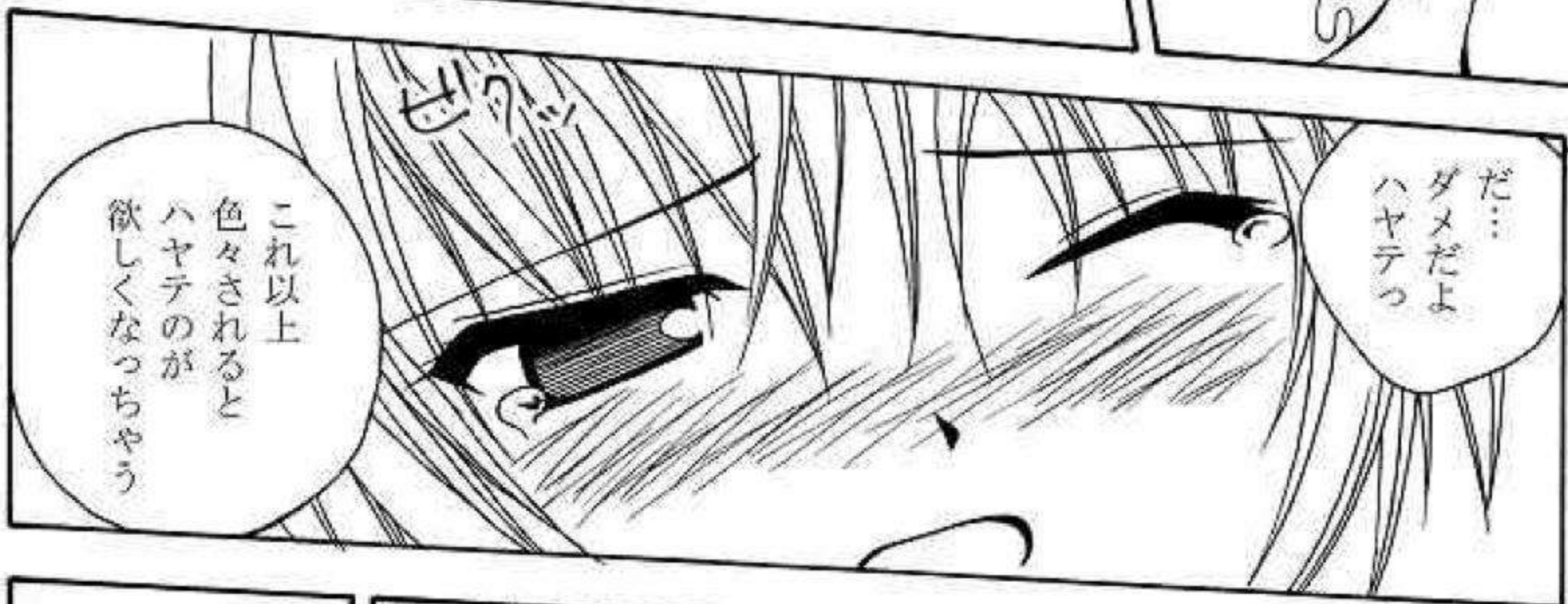
ちやほっ

ん…っ

あっ



ちやほっ





い...
挿れますよ
お嬢さま

びりっ

びりっ

お...
びりっ

お嬢さま
締め付けすぎ
ですよ

ハヤテの
大きいのが
いきなり奥まで
くるからっ



びりっ



おっ
びゃっ

お嬢さまのナカ
さつきから
ビクビク
してますよ

ああっ

そんなに
誘われたら
止められなく
なりますよ

や…あ
そこばかり
だめ…え

おっ
びゃっ

おっ
びゃっ



あ…

じゃあ
どこなら
いいんですか
お嬢さま？

アムッ



ん…あ

じやいほっ
にちっ



ひあっ

答えられないなら
好きなように
させてもらいますよ



ぶぶっ
ずっ

や…あっ

びびるびびる





あ…んっ
はや…て
もうダ…メっ

う…あ

ずいずいぶっ
ぶっ

じいぶっ
ぶっ

がが
がが

ひあ

ふあ

あ…

じいぶっ
ぶっ
ずいずいぶっ
ぶっ

んあ



ひあ...

ふあああ...あ

ガッガッ

あああ...んっ!!

おっおっおっ

ナギったら

いきなり
なんてマンガ
描いて...

そういえば本棚に
ラブ○レブとか
蜜蜜ド■ツプスとか
ホーリー△ラウニーとか
天◇天下とか
一騎●千とか
とかとか...

マリアさん
どうしました?

なんでも
ないです!

終わった

お嬢さまの秘密

鷹宮 沙玖羅

それは、日付が変わって久しく、三千院家の執事を務めるハヤテがようやく就寝しようという時間だった。

パジャマに着替えるべく執事服のシャツのボタンを外していた彼は、背後から聞こえた物音に思わず振り返った。目の前には質素な扉。時刻はすでに丑三つ時。もちろんこんな時間に彼の私室を訪ねる者などいない。いつものポルターガイストかと思ひ無視しようとしたが、相変わらず音は続いている。ノックのようだと思ひ当たったときには、ドアノブが回されていた。

次の瞬間小さなものが飛び込んできたかと思うと、ハヤテの胸にドンとぶつかってきた。

「うわっ、……って、お、お嬢さま!?!」

ハヤテが反射的に受け止めたソレは、まぎれもなく彼が仕える三千院家の令嬢、ナギだった。

「どうなされたんですか、お嬢さま。こんな時間に。怖い夢でもご覧になったとか?」

ナギはハヤテの胸に顔を埋めたまま、首を振った。下ろされた柔らかな髪が左右に揺れる。

「ち……がう。そんなことなら、わざわざここまで来ない」

彼は消灯された廊下の暗さを思い出して、表情を曇らせた。暗い場所を極端に怖がるナギのこと。決死の覚悟でここまで来たのだろう。よほどのことがあったとしか思えない。

「お嬢さま、落ち着いてください。いったい何があったんです?」

落ち着かせるために細い肩を抱きしめ、頭を撫でてやる。小柄な少女は、人並みな体格でしかないハヤテの腕の中にさえ、すっぽりと納まった。

「……あつくて」

「はい?」

ハヤテが腕の力を緩めると、ナギは真下から彼を見上げた。その頬は真っ赤に上気していて、瞳も潤んでいる。せつなげな表情を浮かべた彼女の姿に、ハヤテの喉がごくりと鳴った。「食後のデザートを食べってから身体が熱くなつて、眠ってしまったが眠れなくて」

彼女の訴えに、デザートを製作したハヤテは言葉に詰まった。「…あー、それは…」

心当たりならばひとつしかない。デザートに使用したブランデーだ。けれどそれは隠し味程度の本当に少量で、酔うほどではなかったはずだが。ナギがここまでアルコールに弱かったとは、まったくもって想定外だった。

「すみませんお嬢さま、ケーキに少しお酒を…」

「なっ…お前、最初から私を酔わせるつもりで…」

「ちっちゃ違います！決してそのようなことは！本当に事故みたいなものなんです！」

慌ててナギを解放したハヤテは、大げさに腕を振ってみせた。わざと酔わせたなどと誤解されてクビにされてはたまらない。所持金限りなくゼロに近い状態で、再び路頭に迷いたくはない。「わかった。その代わり、私の執事はお前なんだから、お前がなんとかしろ！」

「なんとかかって…！」

ナギの火照った頬が、はだけられたままのハヤテの胸に押し付けられる。一瞬でハヤテの鼓動が跳ね上がった。

（なんとかかって、なんとかかって！やっばり、そ…そーゆーことなんでしようか…）

うろたえまくるハヤテとは裏腹に、ナギは彼の背中に腕を回し、しがみついた。

「お…嬢…さま…」

所在なさげにさまよっていた腕を、再びナギの背に回すと抱きすくめた。先ほどまではなんということではなかったのに、一度意識してしまえば身体は正直だ。小さくて華奢な身体を離すまいと、壊してしまわないようにと注意しながら腕に力を入れた。直に触れる熱い肌と速い鼓動が愛しくて、ハヤテ自身の熱も追いたてられていく。

「僕にお任せください」

「…んっ…んんんっ…！」

ナギの細い顎を掴んで口吻ける。戸惑う幼い唇は柔らかくて、触れているだけで甘い痺れが背中を這った。

「ハ…ヤテ…。慣れているのか？こ、こんなバイトまでしていたのか？」

ナギがとろんとした瞳で見上げてくる。これはいきなり刺激が過ぎただろうか。

「それは秘密です」

ハヤテは腕力したナギをお姫様抱っこすると、寝台に横たえた。

「ハヤテ」

ナギが恥ずかしそうに視線を逸らす。今から自分が何をされるかくらい、幼い彼女でもわかっているのだろう。胸元できゅつと握られた手がいらしい。

「や、やさしくしろよ」

「はい、もちろんです。お嬢さまのお好きな砂糖菓子のようになんか…」

「んっ…」

うなじを舐められたナギが白い喉を逸らす。

その隙に、ハヤテは彼女のパジャマのボタンを外すと内側に手を滑り込ませた。

「甘く……」

「ひうつ……」

少女の微かな膨らみを覆い、円を描くようにゆっくり回していく。ナギの目から透明な滴が伝った。

「溶かして……」

「ひああんっ！」

先端を摘んだだけで、小さな身体が跳ねた。

いつのまにかハヤテの呼吸は荒くなり、彼はシャツを脱ぎ捨てた。

「ハヤテ……お前けっこうすごいんだな」

赤面しながらナギはハヤテの腹筋に触れた。無駄な肉が削ぎ落とされたそこは、筋肉質とはいかないにしても、少年らしくしなやかだった。

「鍛えてますから」

日課であった筋トレは、三千院家の執事になった今でも欠かさない。以前はバイトの役に立てばと思っただけで続けていたものだが、今は……

「私のため、か？」

「もちろんです」

彼は幼い主に笑むと、健気に勃ち上がった頂に唇を寄せた。彼女のかわいらしい声が耳を掠める。

「お嬢さまをお守りするのために、誰よりも強くなります。なんたつて、命がけですから」

色づいた乳首を吸い上げると、ナギの喉から甘い嬌声が漏れた。歯や舌で弄るうちに、そこは硬くしこって押し返してきた。ハヤテの肩を押し返そうとする腕が震えている。

「やだ、胸ばかり、弄るんじゃない」

耳に吹きかけられる彼女の吐息は蕩けていて熱い。

顔を上げたハヤテは、もどかしそうに腰を動かす少女の痴態を目の当たりにして喉を鳴らした。

「……お嬢さま……」

「ハヤテ……はやくなんとかしてくれ。……あつくて……どうにかなりそうだ」

羞恥に耐えながら懇願する少女があまりにもかわいらしくて、それでいて淫らで、その姿に彼の中の雄の部分がおおいに刺激された。

「失礼します」

ハヤテはナギのズボンを抜き去り下着に手をかけた。それはいつからそうなっていたのか、ずいぶん広い部分が濡れている。銀糸を伝わせるそれを丁寧に脱がせ、慎ましやかにびたりと閉じられた部分を凝視する。

「や、そ、そんなに見るな！」

恥ずかしがって脚を閉じてしまった彼女を宥めて、おそろくは誰も侵入したことのない部分に触れる。入り口を軽く前後させる、指に絡みついた液体ですぐに水音が響いた。

「なんです、こんなこと、なかったのに……」

泣き声に嗚咽が混じる。ハヤテは彼女から零れた涙を唇で拭き、そのまま震える唇に触れた。

普段は横柄な態度を取ることもある彼女だが、こうしてハヤテにすがる姿は、ただのかわいい年下の女の子だった。

「大丈夫ですよ、すべてお酒のせいです。お嬢さまはどこもおかしくなんてありません」

「ひっ」

指先をすばやく出し挿れすると、ナカからさらにとろりとした液体が溢れてきた。

「やっ、あ、あっ」

ナギはぎゅつと目を瞑り、口元を手で押さえた。くぐもった嬌声が零れる。

「大丈夫そうですね。では…」

「ひあつ…！」

根元まで指を挿れられたナギの身体が強張る。けれど、指の本数が増え、弄られるうちに少しづつ力が抜けていった。代わりにびくびくと小刻みに身体が揺れる。

「やつ、ハヤテ、ヘン…身体がおかしい…」

ハヤテの愛撫に勝手に反応する身体を持って余した彼女が彼にすがりつく。

「大丈夫です。おかしくなんてありません。すべて受け入れてしまってください」

「でも…っ！」

「あなたの執事である僕を信じてください」

「……………ん…」

ナギの身体から余計な力が抜ける。ハヤテにすべてを委ねた彼女は、驚くほど艶めいて見えた。

「お嬢さま、気持ちいいですか？ いっぱい感じてください。僕の指に感じて」

ハヤテは指を3本に増やして掻き回した。止めどなく溢れる液体が彼女の太腿や尻を汚す。しだいに大きくなる水音。ナギの肌が火照り細かく痙攣し始める。

「あ、あ、あ、ああつ、」

ハヤテはナギの胸を掴み、更なる刺激を与える。彼女の裸足の指先まで、ぴんと硬直した。彼の指が締め付けられる。

「あ、あ、あ、…ああんっ！」

ひととき大きく痙攣し、ナギはくたたりと身体を投げ出した。整わない呼吸を繰り返す彼女の上に影が落ちる。影は彼女の

唇に触れると、汗で張り付いた前髪を掻き揚げた。

「気持ちよかったですか？ お嬢さま」

「……………ん、……………」

重くなった臉を押し上げながら、無意識にナギが答える。

「それはよかったです。今から何か拭くものを持って来ますから、少しだけ待っていてくださいね」

そう言って部屋を出て行こうとしたハヤテを、ナギは反射的に引き止めた。

「やだ、行くな」

上着をかるうじて引っ掛けているだけの少女の乱れた姿に、ハヤテの欲が身体中を掻き乱す。理性のために目を逸らしてしまいたい衝動を抑えて、彼はナギを見返した。

「すぐ戻ります。部屋も明るくしていきますし」

搾り出した言葉を、少女はことごとく拒む。

「でも、」

気持ち悪いでしょう？と問おうとしたハヤテを遮って、ナギがそろそろと手を伸ばした。

「お前の、それ…」

「…ああ」

彼女の言わんとするところを察して、ハヤテは困ったように笑った。ナギが示した場所は、破裂寸前のように張り詰めている。

「お嬢さまはどうかお気になさらずに」

「でも……………私の、せいなんだろう…？」

「…たしかに、お嬢さまがかわいらしかったからですが、…どうにもなりません。だから、どうか…」

ハヤテはナギを注視するに耐えかねて、視線を逸らした。必死に理性で抑えつけていた欲望が荒れ狂い始め、呼吸が乱れる。



こうしている間にも、下半身の熱は治まるどころか増すばかりだ。

「ハヤテ、私にも…させてくれないか？」

「お嬢さま、なにを…！」

猛る部分に軽く触れられて、彼は焦って後退った。

「やめてください。これ以上は抑えきれぬか、僕にも自信が…」
「抑えなくていい。私がしたいんだ。…まだ足りないんだ…ハヤテが。もっとお前を私に出来ないか？」

ナギは身を起こし、ベッドの傍らに立つハヤテの正面に座った。目元を赤く染めながらも強い眼差しで見上げてくる彼女の様子に、理性の最後の柱が音を立てながら崩れていく。

ハヤテはこつそり溜息を吐くと、観念した。ナギの性格からすれば、抵抗するだけ無駄なのだろう。

「…途中で、…やめて差し上げることとはできませんよ？」

「かまわない」

ナギがハヤテのズボンの前を広げ、盛り上がった下着に触れる。ハヤテは息を詰めて必死に耐えた。観念したといつてもいきなりはやはりまずいだらう。

「でも、お嬢さまはまだ…」

「子ども扱いはするな。私は自分で考えて、自分でハヤテとしたいと思っただけだ」

彼女が微かに震える指先でハヤテの下着から肉棒を取り出した。強がつているのが丸わかりだ。それでも彼女がしたいと望むなら。ハヤテは気の強いこの少女を心底愛しいと思った。

「それは、失礼いたしました」

ハヤテはナギの後頭部を押さえると、自らの性器を啜えさせた。

「んむうっ！」

突然異物を啜えさせられたナギは軽くむせたが、健気にもハヤテのそれに舌を這わせた。わからないながらも、すべての部分を丁寧に舐めていく。

その様は愛撫というよりも、仔猫が悪戯しているような感じだったが、彼の肉棒は確実に質量を増していった。

やがてナギの小さな口には大きくなりすぎると、彼女は先端だけを啜えて吸い始めた。これにはハヤテもたまらず声を漏らした。

「上手い、ですよ、お嬢さま」

ハヤテは褒めるように自分の下半身で揺れる柔らかな髪を撫でた。うれしいのか、ナギも少しずつ大胆になっていく。

「んっ、んんっ」

鼻にかかった甘い吐息が部屋を満たす。

「あっ、」

性器の先端から粘液が溢れてくるのに気付いたナギは、恥じらいの声を上げた。

「もう、このくらいでよろしいですよ」

ナギを放したハヤテは、彼女をシーツの上に押し倒した。むしろハヤテのほうがこのままではもたない。

「やんっ」

彼女の秘部に触れると、まだ十分に濡れて潤っていた。さらに新たに溢れていたのかもしれない。期待しているのか、彼女の秘肉はひくひくと恥ずかしそうに震えていた。

「できるだけ痛くないのと、痛いのと、どちらがよろしいですか？」

わずかに少女の柳眉が顰められる。

「い、痛くないほうで」

「承知いたしました」

ハヤテは手探りで自身を幼い秘部に宛がうと、先端部分を振
じ込んだ。

「ひっ！」

彼女の秘肉が異物を排除するように締まった。

「痛いですか？…やめますか？」

「や…だ…、こんなところで、やめるな」

「わかりました」

ハヤテはナギの細い腰を掴みなおすと、一気に根元まで埋め
込んだ。

「あ——っ！」

信じられない力で締め付けられる。

「…っ…」

ナギの硬く閉ざされた目から涙がポロポロ零れ落ちる。わか
っていたこととはいえ、良心が痛むハヤテは詫びるように、そ
れらを拭った。

「…痛いじゃないか」

しゃくりあげながら、ナギが睨む。けれど、頬を紅潮させて
涙に目を濡らした状態では、男の欲を煽るばかりだ。

「すみません。すぐに気持ちよくして差し上げます」

ハヤテは繋がったまま、ナギの小さな胸を愛撫し始めた。と
たんにいい反応が返ってくる。

「ひあっ、…やあん…」

「感度がいいんですね。かわいいですよ、お嬢さま」

「んっ…」

赤い唇を舐め、そのまま舌を貝殻のような耳朵に移動させる。
「そ、そこ、だめっ」

喘ぎながら力なく抵抗されても、もはや煽る結果にしかなら
ない。つい、苛めてみたい衝動に駆られて、ハヤテは火照るそ

こを唾液でべたべたにして舌で弄った。

「だめえ…ふあっ、やあっ」

真つ赤になったナギがハヤテの髪をくしゃくしゃにして抱き
寄せる。白い肌が汗ばみ、むせ返るような彼女の匂いに興奮が
高まった。

「気持ちいいんでしょう？」

口を離して彼女を見下ろすと、彼女は陶酔と困惑の入り乱れ
た表情を浮かべていた。

「ハヤテ、おかしいんだ。さっきから、ずっと、むずむずして
…」

細くて折れそうな脚がハヤテに摺り寄せられる。ハヤテは少
女の熱い頬に触れると、余裕なくもかろうじて笑みを浮かべた。
ナギの頬にさらに赤みが増す。

「ハヤテ」

「僕に任せてください」

ハヤテはナギの脚を抱えなおすと、腰を揺すった。軽い身体
は簡単に翻弄される。

「ひっ、あっ、ああっ」

腰を持ち上げられた状態の彼女は、シーツを掴んで衝撃に耐
えていた。揺さぶられるたびに、シーツの皺が深くなる。

一呼吸おくと、ハヤテは腰を突き上げ始めた。少女の内壁に
擦られる感覚が伝わってくる。彼女のナカは狭くて熱くて、油
断すればすぐにも放ってしまいそうなほど心地よかった。

「気持ちいい、ですかっ？」

「あっ、…いい…いいよお…、あんっ、…ハヤテえ…っ！」

「…くっ…」

名を呼ばれて、彼の雄が揺さぶられる。勝手に抽挿が速くな
り、最奥まで激しく叩いた。

「ひあつ、あーっ！」

「お嬢、さまっ！」

若い少女を貪っていた。ただ激しく腰を打ちつけ、快楽を追って。彼女は主で、いちばん大切な人で、愛しくて、世界一かわいい人。

「お嬢さま、大好きですよ」

聞こえているかはわからないけれど。

ナギの身体がハヤテを締め付けて強張る。小刻みに震え、息を詰まらせた。つられてハヤテの熱も限界まで昂められる。

「……っ、あ、あ、」

今までとは比べ物にならない快楽が背筋を駆け上がる。ハヤテも身体を強張らせると、なけなしの理性で張り詰めた肉棒を彼女のナカから取り出した。そして。

「やああああんっ！」

彼女のきれいな腹を熱い精液で汚した。

「やっぱり拭くだけじゃなくて、お風呂に入られますか？」

ようやく呼吸が整った主に問いかける。素に戻って、だるそうな彼女の様子に実はハヤテは気が気ではない。

初めてだったのにやりすぎてしまったのではないかと、失礼なことをしてしまったのではないかと、むしろ完全に愛想を尽かされたのではないかと、そんなマイナス思考ばかりが頭の中をぐるぐるしていた。

「いい、そんなことをしてはマリアたちが起きてくるかもしれないからな」

そんなハヤテの心中を知ってか知らずか、ナギがいつも通り

に返答する。その中にいつもより甘い響きが含まれるように感じられるのは、ただの願望だろうか。

「そう……ですか、でしたら急いで拭くものだけでも持って来ます。そのままでは……気持ち悪いでしょう？」

「……そうだな」

苦笑に見送られながら、ハヤテは洗面所まで急いだ。

暗闇を恐れるナギを独りにしておきたくない。それ以上に、今は一時たりともナギと離れていたくなかった。

一夜を共にすれば情が深くなるというが、今のハヤテはまさかそんな状態だった。気の強い幼い主がもう、かわいくて仕方がない。さすがに自分でも色ボケしてるなーとは思いつつも、頬が緩むのを抑えることができなかった。

ナギに触れたい。かわいい声を聞きたい。

できるだけ早く戻るべく、ハヤテは一目散に洗面所に駆け込んだ。

「うわあつ……って、マリアさん!？」

まさか先客がいるとは思わなかったハヤテは、人影に景気よくぶつかりそうになるのを、絶妙の運動神経で留まった。

「なんですか、人を幽霊みたいに」

心なしか、ナギ専属メイドの目が据わっている。それでも、突然飛び込んできたハヤテに驚く様子は見せない。

「す、すみません。でも、どうして……」

ハヤテの背中を冷たいものが滝のように流れ落ちていく。彼はシャツを引つ掛けてはいるものの、屋敷内を歩き回るような格好ではないし、そもそもマリアが起きているのなら、隣にナギがいないことにも当然気付いているだろう。

「そろそろかと思いましたが」

「え？」



マリアはうろたえるハヤテに、ほかほかの蒸しタオルを3つ手渡した。

「あの子の望みが叶ったってことなんでしようけど……」

どうやら、完全にお見通しらしい。ハヤテは氷山の海に投げ出されたような錯覚を味わった。けれど、頭が冷えると、本当に彼女が言わんとしていることに気付いて背筋を正した。

「責任を取る覚悟はあるんでしようね」

彼女は常に、ナギの幸せを考えている。ハヤテは呼吸を整えると、マリアに正面から向き合った。

「もちろんです。もともと僕の命は助けてくださったお嬢さまのものですから。僕はお嬢さまのためだけに生きていきます。どんなときもお側にいて、必ずお嬢さまをお守りします」

「……そうですか」

マリアの目は静かで、その中から感情を読み取ることは難しい。けれど、ハヤテは言葉を続けた。今を逃しては、きっと彼女とこんなふうに向き合う機会はないと思うから。

「マリアさん、僕ね、お嬢さまと始めてお会いしたときに約束したんですよ。命をかけると。お嬢さまだけだと。ですから、僕はお嬢さまのお側にいて、お嬢さまを必ず幸せにして差し上げます。僕はナギお嬢さまの、執事ですから」

何の迷いもなく言い切ったハヤテに、しばらくして彼女は薄く笑んだ。

「まったく、あなたって子は……。早くナギのところに行ってあげなさい。あなたを待っているわ」

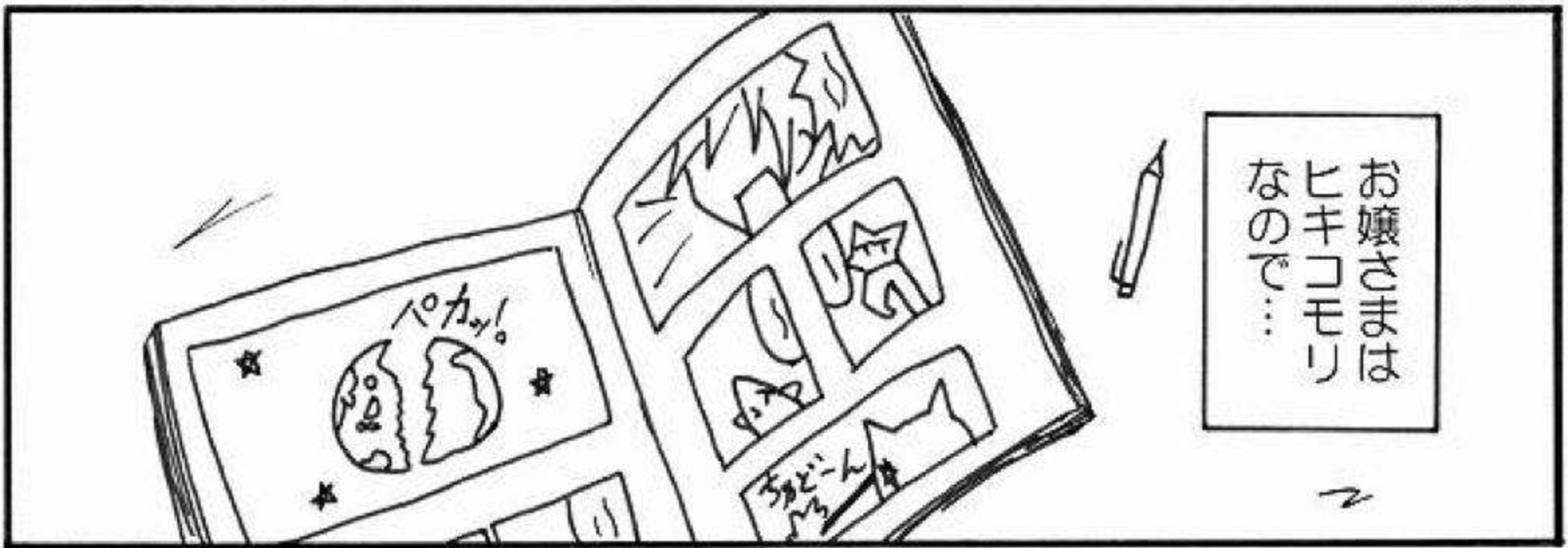
素直に返事をして駆けていく少年を見送りながら、マリアは苦笑を漏らした。二人のまっすぐさが、彼女にはうらやましい。素直になることと、それを受け入れる難しさを知っているから、そんな一歩を踏み出した彼らを見守っていききたい。

主と執事という以上に彼らの間に存在する障壁。目下最大の壁はナギの祖父だろうか。とはいえ、二人で乗り切ってもらわないことにはしようがない。

「これからがたいへんそうね」

満身創痍の二人を思っ、彼女は姉の顔で微笑んだ。

——終わり——



お嬢さまは
ヒキコモリ
なので…



私も
北斗〇拳と
南斗〇鳥拳を
極める！

すぐに
マンガの影響
を受ける。

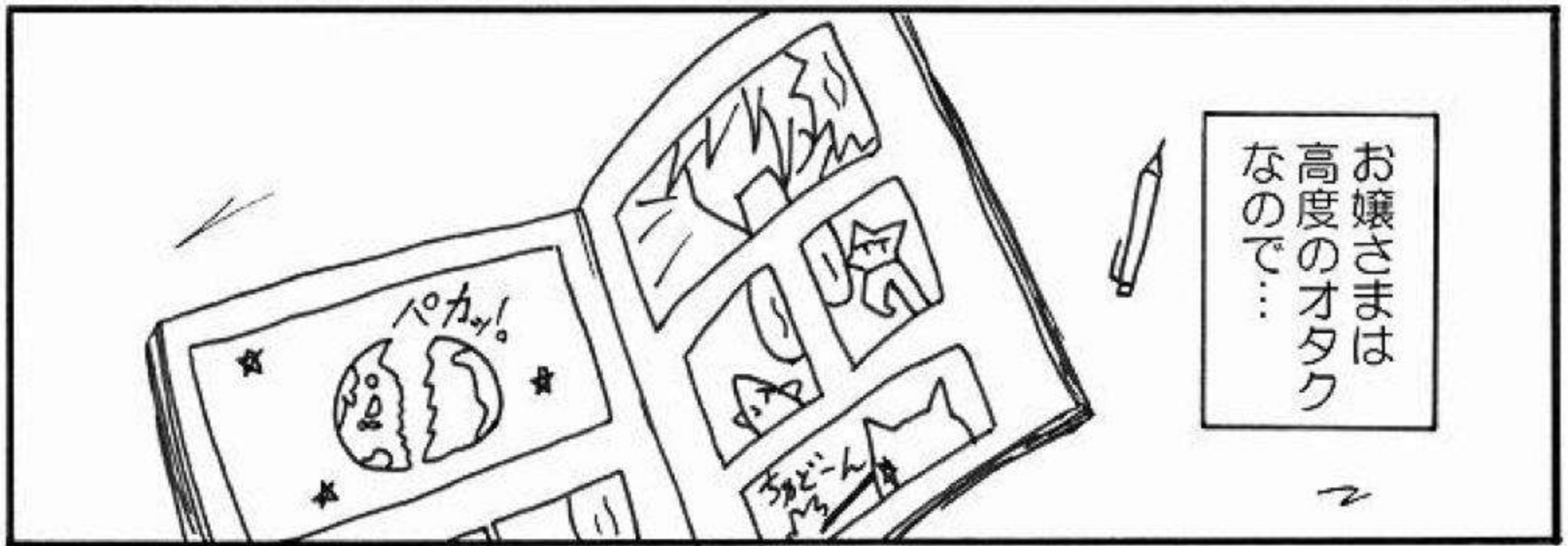
ぴぶ〜っ ♪

※きっとあなたの予想通りのことが起きています。



お前はおそらく
死んだかもしれない！
(きめ台詞だから)
が、きっとハヤテは
鍛えてるからよもや
万が一にも大丈夫だ
と私は信じてやまない！
(多分)

ひでぶっ



お嬢さまは
高度のおたく
なので…



私も吸血鬼
(できれば真祖)
にならねー!

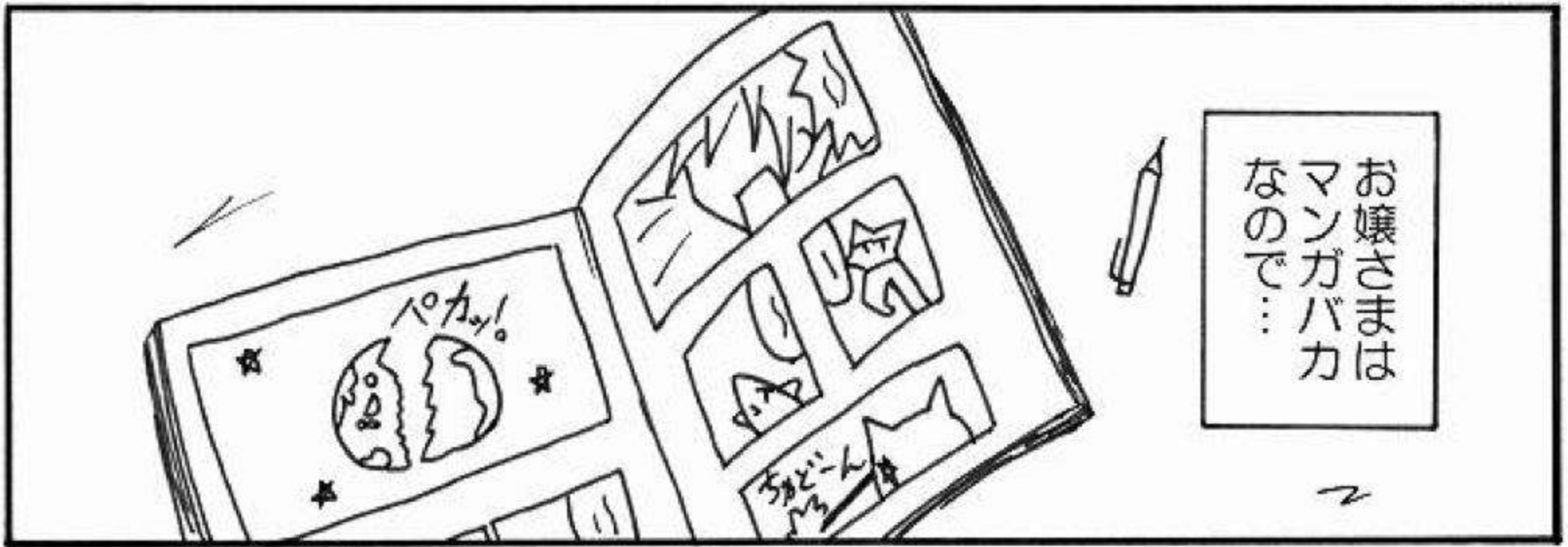
すぐ
マンガの影響
を受ける。



お嬢さま、死の淵で
鬼の力に目覚めたり
ビームを目視で避けたり
イデオンゲージが
溜まって大変なことに
なりそうです!

見せられないよ♪
どぼどぼ...

ハヤテは
鍛えてるから
大丈夫だ!
(多分)



お嬢さまは
マンガバカ
なので…

~



「お医者さん
ごっこ」を
おもしろい

すぐ
マンガの影響
を受ける。



免許のない人は
きつちやダメ…!

大丈夫!
黒いジャックも
無免許だった!



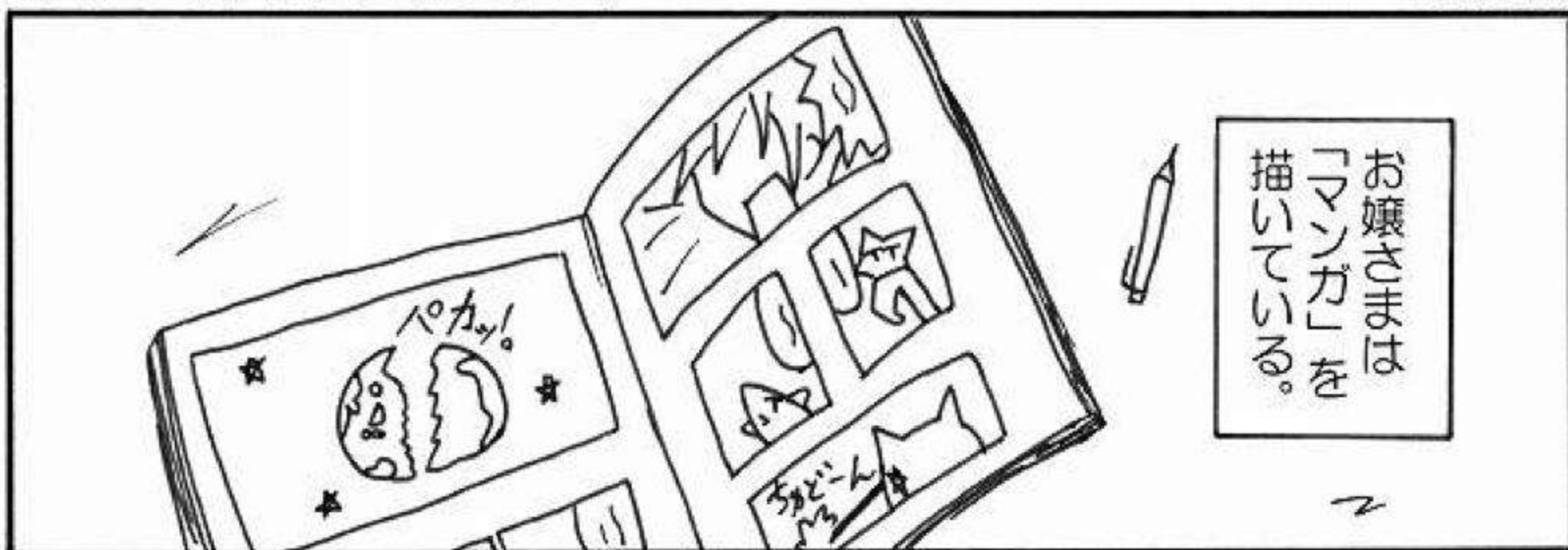
見せられ
ないよ♪

ふいしゃ! ばいしゃ!

どぼどぼ...

お嬢さま、
麻酔を使わないと
痛さで意識が朦朧と
してきます…。

ハヤテは
鍛えてるから
大丈夫だ!
(多分)



お嬢さまは
「マンガ」を
描いている。

〜

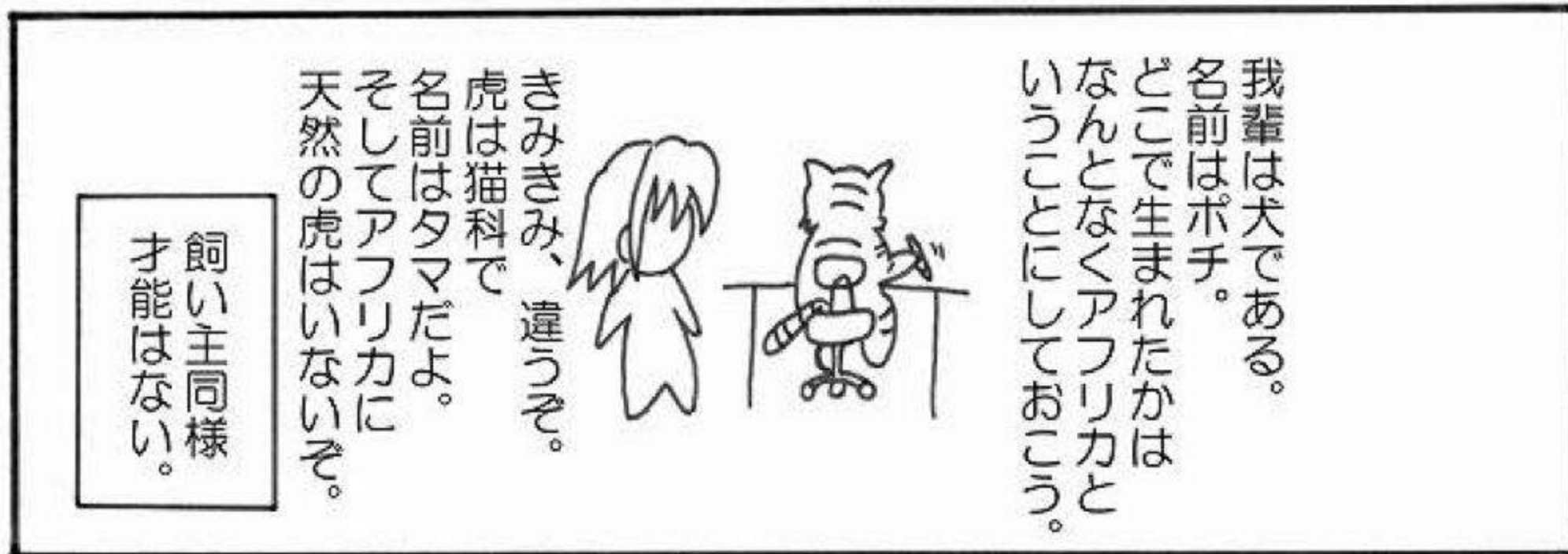


執事は
気付いて
しまった。



新作を執筆中
だが何か？

タマ（虎）は
文学小説を
書いていた！



我輩は犬である。
名前はポチ。
どこで生まれたかは
なんとなくアフリカと
いうことにしておこう。

きみきみ、違っぞ。
虎は猫科で
名前はタマだよ。
そしてアフリカに
天然の虎はいないぞ。

飼い主同様
才能はない。